

すてきなあなたへ

編集 佐倉市宮ノ台女性井戸端会議

発行 佐倉市宮ノ台 4-26-8 tel & fax 043-461-7004

井野長割遺跡はどうなる

～佐倉市は 6.7 億円で土地購入へ動いたが～

補正予算がついたのだが

市長・市議の選挙後はじめての6月市議会には、19年度補正予算案が提出されていた。そこには、井野長割遺跡の大部分(約 20,400 m²)を井野東土地区画整理組合から買い取るべく、約 6 億 7000 万円が計上されている(1 m²あたり 32,800 円)。井野長割遺跡は、2005 年 3 月、国指定の史跡となったことは本誌でもお伝えした。井野小学校敷地を含む周辺区域に広がる、この遺跡は、3500～4000 年前の縄文時代後期の集落跡で、環状盛土遺構は、全国でもまれに見る貴重な遺跡として、学界や歴史愛好家たちの間で有名となった。高さ 2m ほどの小山(マウンド)が中央くぼ地を環状(直径 150m)にめぐり、外盛土・内盛土合わせて 7 基が存在していたことが分かっている。私も遺跡の現地見学会やシンポジウム、研究発表会にも何回か参加しているが、雑木林のくぼ地の真ん中に立っていると原始の闇とロマンを肌で感じ、関係者の熱気が痛いほどわかる機会だった。

その財源は、税金なのだが

補正予算案によれば、土地購入費の 6 億 7000 万円の財源は地方債、すなわち佐倉市がとりあえず借金をして土地区画整理組合に支払うのだが、そのうち元利合計の 8 割が国から交付されることになる。「国指定」には、それだけの予算的措置がとってもらえるメリットがあるのだが、これを手放して喜んでいいのか、私には、少々疑問に思えることがあるのだ。とにかく 6 億 7000 万円以上の税金が投入されることになるのだが、なぜ、いま、6 億 7000 万円なのか、まるで土地の値上がりを待っていたかのように。

遺跡の発見は、井野小学校建設にさかのぼる

井野小学校は 1971 年開校するが、小学校建設中の 1969 年 5 月にヤマトシジミの小貝塚、縄文土器片の大量発見に始まり、1970 年 7 月慶応大学グループの第 1 次調査により縄文期の遺構が示唆された。1973 年の第 2 次調査では、縄文期後期・晩期の住居跡、土器などが発掘され、保存の必要性が言及されている。この間、小学校整備のため、マウンド 2 基と 1 基の一部が消滅。この区域は、開発業者山万の第 3 期開発区域に組み込まれていたが、1998 年井野東土地区画整理組合による開発にシフトし、2001 年になされた第 4 次調査により、環状盛土遺構の全容が確認され、その保存状況が良好なこと、貴重さが再認識されている。それでも、組合と

佐倉市教育委員会は開発のため発掘調査の記録を保存するだけで、遺跡の消滅もやむなしと考えていたという。四半世紀にわたる発掘調査の空白の意味を考え合わせると、開発業者と行政の歴史や文化への認識の甘さに突きあたる。

しかし、その後、研究者たちの努力により、2001年の調査再開から2005年第11次まで発掘調査が続けられ、国指定にいたる。ある研究者は、栃木県小山市の寺野東遺跡の環状盛土遺構が1995年国指定になったことを踏まえて佐倉市の「環状盛土に関する知見と検討は充分であったのだろうか」と顧みる（「井野長割遺跡の国指定史跡報告」『佐倉市史研究』19号2006年3月）。もし井野小建設時から発掘調査を続行していたら、より完全な形の遺跡がもっと少ない予算で保存できたのにと残念なのだ。教育委員会に土地購入費の件で問い合わせたら、元の地権者の方ですか、と逆に質された。釈然としないのは元の地主さんたちも同じではないのかと。さらに、佐倉市発行の印刷物にあった「井野長割発見の年」の印刷ミスも私が指摘するまで一年以上気付かなかったというのだ。（M）

私の好きなジョギングコース ラベンダーの香りを楽しみながら~~~~~

このところ毎日、北公園から鶯のなく声が聞こえてくる。午前中の早い時間、時には夕方も。さわやかで涼しく、過ごしやすい時間に鳴いているようだ。様々な鳴き方で、ほんとにうっとりするほど愛らしくて、魅力的な声である。北公園に近い我が家の二階にいると鳥たちのいろいろな鳴き声が聞こえる。公園隣接の林が宅地となってもまだがんばってくれているようだ。6月に入って私の散歩、ジョギングコースの楽しみが増えた。ひとつはユーカリゴルフプラザの新川側にある大規模水田に作られたラベンダー畑。早咲き、紫の濃いラベンダーが見事に咲いていた。今は、遅咲きのものが満開である。ここからの眺めはどこまでも田んぼが広がり、八千代少年自然の家に向かうコースを走るのが好きだ。もうひとつは、宮ノ台2丁目に隣接する「福祉の街」の入り口にあるバージョナルセラピーガーデン。ここもラベンダーが咲き誇っている。もともとここにあった木々の下の散歩コースには、アジサイ、ローズマリー、黄花コスモス、などなど。車椅子のお年寄りが散歩を楽しんでいる。ところどころにある木陰のベンチに座り、花々を眺めるのはほっとするひとときである。（H）

~~~~~ 夜のウォーキング きつく減量を言い渡されて

今年3月、人間ドックに入り、検査後の医師との面談で、きつく減量を言い渡された。思い当たることも多い。まずは食事の改善、そして何よりカロリーを消費すべく、運動をすること。犬との散歩を長くする、太極拳には休まず参加する、努めてまとまった距離を歩く。はじめの頃は、銀行・郵便局・買い物と用事を作ってはユーカリが丘駅までの片道を、ときには往復を歩いたりした。合計で一日一万歩を軽く越した。しかし、長続きはしなかった。

最近、夕食後、近くの井野中のグラウンドに入り込んで200mのトラック10周のメニューを心がける。週日は、ほぼ10時過ぎまで、2階の職員室に明かりが点いている。週末は体育館が利用されていることが多く安心感もある。近頃は、帰りの遅い先生に「こんばんは」と声をかけられることもある。広い夜空の月や雲、星の動きを楽しむ余裕もできた。直線コースを走ってみることもある。調子が良ければ井野中の外周に出る。そしてよく出遭うのが、熟年夫婦のウォーキング。高校生や男性ジョガーたち、すれ違うときの、その息づかいがうらやましくもある。（M）

菅沼正子の映画招待席 23

リトル・チルドレン

—とまどいながら自分の生き方を探して—

タイトルは「大人になれない大人」を意味しているそうだが、この言葉、好意的に解釈すると「子どもの純粋な心を失わないでいる大人」ということでもある。スピルバーグなどはこちらの類だが、最近の嫌な事件をみていると、大人になれない大人が多すぎるようだ。で、この映画のキーワードは、良い意味でも悪い意味でも「子ども」。

主人公たちは、かつて自分が想像した将来の設計図とはこんなものだったのか、もし夢が間違っていたのなら、軌道修正するにはどうすればいいのか、みんな人生の途中でとまどい、悩み、もがいているのだ。

3歳の女の子が真夜中の公園で、外灯に群がる蛾に見入っているシーンがあるが、このワンシーンこそ映画のテーマを象徴的にとらえていて、興味深いと思う。

ボストン郊外のちょっとリッチな住宅街。夫の成功でこの街に家を買えたサラ(ケイト・ウィンスレット)。夫を会社に送り出したあとは、3歳の娘を公園で遊ばせるのが日常。近所の主婦たちもだいたい同じパターン。はた目からは、幸せそうに見えるサラだけれど、心の中はなにも満ち足りたものがない。

公園ママたちのあいだで”プロム・キング”とあだ名されているイケメンの若いパパがいる。彼の名前と電話番号を聞き出せるかの賭けで、サラはそれ以上の、ハグしてキスまでしてしまった。驚いた公園ママたちは、まるで汚いものでも見てしまったかのように、子どもを連れて公園をひきあげていく。

遊びのつमりのキス……なんと甘く、やわらかく、心の中にじわーとしみこんでくる。久しく忘れていたこの感覚。心のくつろぎ。体がうずうずしてくる。

彼の名はブラッド(パトリック・ウィルソン)。弁護士をめざして2浪中。だから才色兼備の妻(ジェニファー・コネリー)には頭があがらなく、不平不満で心はいつもブルー。心の満たされないもの同士、いつしか、心の中の衝動が騒ぎだす。

そんな折り性犯罪者のロニー(ジャッキー・アール・ヘイリー)が出所してきたから街はたいへん。人々の反応が、ジョーズでも現れたかのような驚きと静寂でおかしい。このキャラクターを登場させたことで、単なる不倫ドラマではない、社会派ムードと、文学的な香りもちりばめ、クオリティを高めている。

孤独やエゴをかかえた登場人物たちの日常のエピソードはなんともほろ苦いが、トッド・フィールド監督は、自分の歩いてきた足跡は消せないけれど、希望に向かって、明日に踏みだそうとエールを送る。

ケイト・ウィンスレットの”普通の主婦”の演技は並ではないし、70年代のアイドル、ジャッキー・アール・ヘイリーの孤独感に満ちた演技は強烈。ともにアカデミー賞にノミネートされた。

(7月28日より公開予定)

後期高齢者医療制度が始まります！

高齢者に相応しい制度とは？

来年4月から75才以上の後期高齢者を対象とした「後期高齢者医療制度」がスタートする。

- ・複数の病気にかかることが多い
- ・慢性化しやすい
- ・認知症の問題が見られる事が多い

などの特性のある後期高齢者は74才以下に比べ約5倍の医療費を使うと言われている。H19年度総医療費推計によると75才以上の医療費は年間65万円～75万円となっている。後期高齢者だけの医療制度を作り、増え続ける医療費の適正化(抑制)を図ろうとするものだが、開始まで9ヶ月という現在に至っても、制度の詳細が決まっていない。

明らかなのは、

- ① 介護保険と同様に個人で加入し、保険料が一人ひとりに請求される
- ② 保険料は年金から天引きされる(月額1万5千円以上の場合)
- ③ 被用者保険(組合保険・共済保険・政府管掌保険等)の被扶養者となっていて、保険料を支払っていない人も75才になると自動的に加入し、保険料が請求される
- ④ 保険の費用について 1割→保険料 4割→各保険者より支援金 5割→公費(税金)
- ⑤ 自己負担は1割、但し現役並みの所得のある人は3割負担等である。

保険料は国の試算によると平均的な厚生年金受給者(年額208万円)で月額6200円、基礎年金(79万円)で月額900円とされている。保険料率については保険者である広域連合が決めることになっている。これは、市町村の連合体で、都道府県ごとに設置され、市町村から選出された議員(千葉の場合は各議会の議員から1名選出)による議会を持ち、そこで運営について協議決定される。市町村は保険料徴収等の窓口となる。

夏から秋にかけて制度の根幹となる「高齢者にふさわしい医療の提供及び診療報酬」についての詳細が決められる予定となっているが、高齢者の受診を大幅に制限するものになるのではと危惧している。90才以上の人が珍しくない今、十数年以上の健康を託す医療保険が使いつらいものになっては困る。(K)

編集後記

6月27日の『朝日新聞』には、介護施設や保育所を擁することによって「まちを年取らせない知恵」を語る山万専務、というインタビュー記事があった。山万といえば、去る3月「夢と子どもを地域ぐるみで育てる街・ユウカリが丘」と銘打った『朝日新聞』の2面見開き広告も記憶に新しい。いま、私たちの街では、本誌冒頭でも触れた土地区画整理組合による48%の開発が進んでいる。つぎつぎに消えてゆく雑木林に涙する日もあった。加えて、周辺宅地より6m以上高い盛り土、その盛り土の崩落、不十分な産廃処理、造成中の工区からの土石流出、振動による周辺住宅のクラック問題などが続いた2年間。14階のマンション工事もまもなく始まる。この組合による開発事業を仕切っているのが、7割近い面積を所有し、業務代行でもある不動産会社「山万」であった。